p r ima p r ima

絲色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｐｒｉｍａ　ｐｒｉｍａ

【Ｎコード】
Ｎ８７７５Ｆ

【作者名】
絲色

【あらすじ】
――――――――――――――――――大学生になった三木汐里はひょんなことからまったく関係のなかった久木彩香と仲がよくなった。しかしある日、二人の関係を大きく変える事実が――――
※百合小説です――嫌な方は避けてください――――――――
２／１３執筆者復活しました、（，ー、）ノ――――――まだ修正ですが……

ｐｒｉｍａ　ｐｒｉｍａ：０１　汐里（前書き）

――――――――――――――――――――――

※百合小説です――

嫌いな方はお避けください

prima　prima：01　汐里

――――――――――――――――――――

頭がくらくらする…慣れない酒を飲みすぎたせいかな――

三木　汐里は夜道を一人歩いていた。彼女の通っている大学では、年に一度冬木祭というものを催している。

ここ、冬木町になぞらえて行われた、所謂大学の創設記念祭のようなものだ。

今日はその祭の打ち上げがあったのだ。汐里自身乗り気ではなかったが、同じサークルのメンツがたたないということで参加を余儀なくされた。

普段はお酒は飲まないのだが、隣に座った嫌にハイテンションな男の先輩にすすめられ、結局は味もわからぬままにたくさん飲まされてしまった。

ふぅ――――酔ってほてった顔に夜風が当たって気持ちいい。

――――――ガサ――

気のせいだろうか…今後ろから変な音が…。急に怖くなって少し早歩きにした。

――コツ―コツ――

また聞こえた、それも今度ははっきり―足音が。一気に酔いがさめて背筋からぞくぞくして走り出した。

――コツコツコツコツ

怖い…怖い、怖い！！！！！！

走っても、走ってもまだ聞こえてくる。怖くて涙が出てきた。

ガバッ――――

急に草影に引き込まれた。

prima prima：02 汐里

――――――――――――――――――――――――

すぐさま叫ぼうと思ったら口を押さえられてそれすらできなかった。
もうなにがなんだかわからなくって、涙を流してえぐえぐいっていたら、近づいてきていた足音が遠のいていくのがわかったが…

このひとはいったい…

「大丈夫かしら…？」
女のひと…？
「あなた…なんだかつけられてるみたいだったから…」

あっ……このひと

「ありがと…ございます…」

助けてくれたんだ…
いつの間にか止まってた涙もまたどわっと溢れでてしまった――
「うっ…ぐ」
「わわぁ―ちょ、ちょっと…
泣いちゃったよ…」

あれ…どこだろ―ここ…
目が覚め視界に入ったのは白で統一された綺麗な部屋だった――
今自分がいるのは…その部屋のベッドの中

「――ん…ここは…？」

「あら、目がさめたのね」

「え…？あれ？えと…どうして…？」

「あなた覚えてないの？」

あれ…もしかして…
「あ！！すみません！！
ご迷惑かけました！！えっと…」

「いいのよ、いいのよ――
危うく知らない男に
襲われそうだったわね…

もう怖くないからね――
安心しちゃったのね」

「ごめんなさい…」

「そんなことより…

おうちの人とか大丈夫？
ひとりぐらしかしら？」

「あ、大丈夫です…
家は大学遠いので…アパートに…」

「そう…じゃぁ、良かったら
泊まっていきなさい――
あたしは彩香―久木　彩香よ」

あたしも軽く頭を下げながら
三木　汐里…とつぶやいた…

結局、あたしはお言葉に甘えて
泊めてもらうことにした。
女同士だし…と思ってだ。

そのあとは、酔いがまだまわっているみたいですぐに寝てしまった。

primaｐｒｉｍａ：０３　彩香―汐里

――――――――――――――――――――

はぁ――…今日は大変な一日だった。

可愛らしい女の子を見かけたら、様子がおかしくて…

不審者から助けてあげたら、急に泣き出してしまって…

涙であたしの服もびしょびしょ…

しかも泣きつかれてあたしの胸で寝息を立てちゃってるし…

この子、誰にでもこうなのかしら…？仮にもあたしが不審者だったら今頃違う涙流してるわよ…

でも、なかなか細くって可愛い子じゃないの。夜に、それも一人で、酔ってあんなとこ歩いてたらそりゃあ危ないわよ…

あのあとも、彼女運ぶだけでも疲れちゃったし…今日は寝ようかしら。

ベッドはあの子が使ってるし…ソファで寝ましょう…。

次の日――――――――――――――――

それはお昼に差し掛かりそうな遅い朝…久しぶりに暖かい中、陽射しに目を覚ました…

明るい…もう朝なのか…

白い清潔なシーツに包まれた私は、泣いた疲れを癒すような――
ひんやりとした手触りに思いの外、
ぐっすりと寝てしまったみたいだ…

それにしても空っぽな部屋だ…
この寝室にはベッドと棚が一つすっきりと収められている――

のど―かわいたな…
水を求めて寝室をでた…

ずいぶん広い家だ…一人暮らしには思えないが――
そこで一つ気がついた、
あのベッドもシングルではなかった、ということは……

やめた――勝手な詮索は失礼だろう

prima prima:04 汐里

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

リビングへと出ると、昨日の久木さんがソファに寝ていた。

――しかし彼女の足にかろうじてかかっていた毛布はおちかかっていて、

彼女の身体はほぼ何もかぶっていないのと同じようなものだった。

急いで毛布をかけなおしたが――遅かったみたいだ。

くしゅん――――と小さなくしゃみが耳をかすめた。

「――くしゅん…」

「あっ…えと…」

慌てて何とかしようとしたが、ええいの一声でどうにかなる問題ではなかった…

どうしたものか…

とりあえず――彼女のおでこに自分の額を近づけた…

「わぁ、凄い熱いです…」

くっつくまえからもう彼女が熱いのに気がついた…やはり熱があるようだ。

――けほっ…けほっ……

さっきのかわいいくしゃみとは違って、かわいたせきとともに、久木さんがむくりと身体を起こした。

「あの…大丈夫ですか…？」

「ああ…けほっ…うん、、なんか風邪…かなぁ…ごめんね…けほっ…けほっ」

「けほっ…けほっ…

えと…汐里ちゃん…よね…」

「あっ…はぃ」

「ごめんね…あなた大学生よね…

学校は…」

「学校は大丈夫です！！

それより久木さん…熱が…」

「うふふ…いい歳こいて

熱出ちゃっ…けほっ…けほ…」

あっ…いけない、お水！！

「ちょっと待っててください！」

キッチンから適当なグラスに水をそそいだ――

「あの…お水を…」

「あぁ…ありがとう…」
水を口に含むとまた久木さんは瞳を閉じたが…

「こんなとこに寝てたら風邪治りませんよ…えっと、あっちで寝ていましょ…？」
「えぇ…」

「ごめんなさい…あたしが昨日…あんな…」
「いいのよ…あたしがそうしたかっただけだから」

そう言うとまた久木さんは瞳を閉じた…
それから私もベッドの横に座ってしばらく眠ることにした…

prima　prima：05　彩香

――――――――――――――――――――

「久木さん…体調はどうですか？」

「ん…だいぶましよ…ありがとう」

気づけば額に冷たい濡れタオルがのっていた――

「すみません…勝手にキッチン使わしてもらいましたが…えとお粥作りましたので…」

…お粥？…いつぶりかなぁ…

「ふふ…ありがとう…」

ついにんまりしちゃった…

「？――どういたしまして…じゃないか――すみません…あたしがベッド占領してたから…」

よく謝る子ねぇ…ふふ…

「ふふふ…謝ることじゃないわ…あたしが勝手に風邪ひいただけだし…

あ――、美味しい…お粥なんて久しぶり――…それも他人の作ったやつは――」

「美味しい…ですか？

よかったぁ――…」

ふふ…可愛い子…
表情がぐるぐる変わって…

「…？？」

顔、赤いわ…ふふ…見つめすぎたかしら――

「そうだ――…あなた、一人暮らしって言ったわよね――」
「はい――――…まぁ」

「一度帰らなくて平気なの？」
「えぇ…別にあそこには寝るくらいしか用はないんです」

「ふぅん…
あぁ――、美味しかったわよ――
汐里ちゃん、誉めてつかわすわ」

「ふふ、光栄です――」

それから私も元気になったのでお互いのことについてしばらく話していた――

prima prima：06 彩香

――――――――――――――――――――

どうやら汐里ちゃんは
あたしの住んでいる秋保町から歩いてすぐの冬木町の外れに住んでいるみたいだ――。

学校もあたしがよく通る道の近くにある、有名な大学の冬木町キャンパスに通っていることがわかった。

もしかしたらよくすれ違っていたりしたのかもしれない。

「――で、久木さんはどんな職業についてるんですか」

目をキラキラ言わせながらきいてきた
「実は、薬剤師の免許とっててさ――それでドラッグストアとかでバイトとかしたりで稼いでんの」
――嘘は、ついていない。

「え、でもここ…一軒家ですよね？」

「あ――…それね――…」
苦い思い出が蘇ってくる――

「あっ…あのえと…」

ふふ…不味いこと聞いちゃったみたいな顔して…

「それがね、うちの親が元々お金持ちでねぇ――これは親から譲り受けたのよ」

年甲斐もなく、姉ちゃん凄いでしょ――なんておどけてみたり。

「なんだぁ、そうなんだぁ――」

なんか安心した顔で汐里ちゃんも顔を崩してた――

これは、嘘。

ホントは今はもうそんなバイトはしていない。有り余るお金と、一人暮らしには大きすぎる、この家で何もしないで――ただ、一日を外を眺めたりして過ごしていたのだ。

たまに、こないだ汐里ちゃんに会ったときみたいな時間に散歩をしたりする。

それだけ。あとはホントになにもしない。部屋が少し汚れていれば、必要以上に掃除をして…変な満足感にまた空虚を覚えたり――

寂しい女…かな？

primaprima：07　彩香

――――――――――――――――――――

夢中になってずっとしゃべってたみたいだ――もうお昼だ。

「久木さん――もうそろそろ、一回お熱はかりましょ―」

「あ、うん―そうね」

そういえば、人としゃべる機会なんてあまりなかったからかしら――つい夢中になってて、汐里ちゃんに熱って言われたら、はっとしてしまった。

――ピピピ―ピピピ――

「…37．2℃ですか――

大分少し下がりましたね、もうちょっとですよ」

「うん、ありがとう――凄く元気になったわよ」

「もうちょっと寝てましょね―」

「うん…そうさせてもらうわ…

そうだわ―汐里ちゃん、今日はありがとう…もう家に帰ってもらってもいいわよ――」

「いえ、元はと言えば私のせいですから…今日は一緒にいます！！」

「そんな、悪いわ――帰りなさいって」

「いいえ！一緒にいます！」

「だけど――…」
案外、頑固ねぇ――…

「――それにっ！！」
彼女が息をあらげてる――

「――それにあたし…
アパート…もう少しで引き払われるとこで…帰っても…あと2、3日で…うぅ――」

どっっっ――思わずずっこけそうになる…

…なんだそりゃ――急に話しがおかしくなってきた…

ちょっと待ってよ…泣かないでよ――――…
こっちも泣きたくなるさ――――――――…！！

prima　prima：08　彩香

――――――――――――――――――――――

ちょっと待ってよ…

それってあなたが帰りたくないだけでしょ――

「これも何かの縁だと思いまして…少しの間、ここに居させては、くださいませんでしょうか、、、」

あら急に敬語…？

「でも――あなたとあたしは…

その…親しい仲だったとかじゃ…」

「そこを何とか…！！！」

…何とかっつってもねぇ――

まぁこの家…

一人じゃもったいないかしら――…

「ただでとはいいません！！だから…」

「（いや、ただで良いわよ…）

まぁ…じゃぁ、そうねえ――」

汐里ちゃんは顔をあげると、ぱあっと輝かせてこちらを見た――

そんな顔されたら……

断れないじゃないのよ！！！！

つくづく自分のお人好しには呆れてしまう…
「いいんですか――！？」
んんだめだ…汐里ちゃん、笑顔が――眩しい…
「じゃあ…いいよ――…」
かくして私たち二人の変な同居生活が始まるのだった――

――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――

…ん、もう夜かな――…
部屋も暗い…
熱はもうすっかりみたいだ――、昨日からいろいろとありすぎて――疲れてしまった…
当の本人は……
――ガチャ――――――
――久木さん？
と、言って中に入ってきた
「熱は――、」
おでこに額をくっつけてくる
「ない…みたいですね！！

良かった――――！！
今、晩のご飯作ってるんです！！
今日は、ハンバーグですよ！」

ハンバーグ…もうすっかり
ここの人だわ…

「今日は」ってなに…「今日は」って…

prima prima:09 汐里

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

今日は長い一日だったなぁ
でも――これでなんとか、居候という形ではあるけれども――住む場所ができたよ…
良かった――この家の人も優しそうだし…
どうなるかと思ったもん…バイトしてた居酒屋も急に潰れたし――来月（今週末）あと2日からは家賃があがるだなんて…仕送りもらっても結構きついのに…！！
たあっ、ハンバーグ！！焦げる…！！

「ふぅ…せーふ――！！」
ソースかければ大じょ…う…ぶ……」
「何がせーふかしら？」
ぐ…！この声は…！！
「あら、焦げてるわよね」
にっこり笑ってるけど…怖いですよ！！久木さん！！

前言撤回！！優しそうじゃない！！

「いえ…気のせいで…はぐ！！」

久木さんに脳天チョップをくらった…！！

「このフライパン、焦げるととれにくいから——気をつけてね？」

また、さっきの優しい顔だ。にしても綺麗な顔…みとれそう…

久木さんはとても背が高くて…スレンダーで、羨ましい。顔もとても整っていて…飾らない感じがどこか中性的な印象を受ける——

当の本人は、あたしに変わってハンバーグのソース作り…

あたし…出番ないじゃん…

久木さんがきたら、ことがすいすい運ばれてった。——結局あたしは座っておとなしくしていた…うぅ、惨め…

しばらく久木さんの優雅な動きにみとれていて、料理が揃ったことに気づいていなかったらしく——

「食べましょ——」

と言われて、つい舌をかんでしまった。

「あっ、は、…はい」

…あぁ—恥ずかしい…

赤面してうつむいていたら美味しいよこれ、と言われて、また赤面してしまった。

prima prima：10 汐里

――――――――――――――――――――

今は自分のアパート――

必要なものを持って今日限り、引き払うつもりだ。

サイフ、衣類…大学のものとか…

できるだけ最小限にものはおさえたかった。荷物を全て黒いドラムバッグに詰めた――このバッグでこの町に来たのだが――また、初心に帰った気分だ…

管理人さんにあいさつをして、すぐにそこを去った――

歩いて10分…それだけの距離。HISAGIの表札を確認して、一度大きな家を見上げてみた――

改めて見ると、シックな造りの綺麗な家だった。

――日本らしくないそのレンガ作りの壁に、装飾のない黒いランプが下がっていて、そのしたにHISAGIと記されていた。

急にランプに明かりが灯されると――HISAGIの字も照らされて、ドアからは鍵をあける音がした――そして私は歓迎されているような気になって、暖かい気持ちで階段を登っていったのだった――

「ここは最初、ピアノを置こうと思っていたのだけど――いろいろあってね、今はご覧の通り、空き部屋だわ」

部屋には誰も使わないクローゼットと窓が西向きと北向きに一つずつあったが、それら以外には目を引く物はなかった――

しかし、自室にしては、今まで持った中では一番大きくて――とても嬉しかった。

「こんな大きなお部屋…お借りしてもいいんですか！？」

「えぇ、今日からはここが、あなたの部屋。ここに帰ってくるのよ」

prima prima：11　彩香

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「今日はまだその部屋、なんにもないから――一緒に寝ましょ？」

「はっ、はい！！」

はきはきしてるのに、どこかちぐはぐな感じで――可愛い…ふふ。

「お風呂お湯わかしといたから…汐里ちゃん、どうぞ――」

「あぁ、ありがとうございます！！」
「そんなお礼なんていいのよ、ふふ」

私は汐里ちゃんが帰ってくる前に、一足はやくシャワーを済ませたから、もうなにもすることはない――

あ、――そうだ、、、

「お風呂、気持ち良かったです！！
大きかったし――！！
って…あれ、なあにしてるんですか――？」
「今、汐里ちゃんの部屋に置く家具を探してるの」

大きなカタログを引っ張りだして、物色を進めていたのだが、汐里ちゃんも上がってきたみたいだ――

「…！！そんな、家具だなんて！！
だめですよ――！！ただでさえ居候させてもらってるのにい！！」

「いいのよ――、せっかくの同居じゃない？楽しくなくちゃ？」

だあからぁ――っと言ってカタログにせめよってきたが、背丈の違いは大きかった――ぎりぎりのところでカタログにてが届かず――結局、あたしが抱きすくめて、そのままソファに座らせた――

――今は太ももの間にすっぽり収まっている――

「さぁ――家具、家具♪」

「もぉ――――！！！！」

prima prima：12 彩香

――――――――――――――――――――――――

汐里ちゃんってば、まだ唸ってる（笑

「これなんてどう――？」

「ん――…高いですょ…」

なかなか頑固ね――

「大丈夫だってばぁ――あたし、お金持ちなのよ??」

「でも――私なんかに…お金使ってたらもったいないですよ…」

「私なんか――って言っちゃだめよ?そうだ!!明日はあいてるかしら…?」

「一応、午前で学校は終わりです」

「そっか――じゃあ明日買いに行こうね?」

「で…でも…」

汐里ちゃん、あれから一応約束は受けてくれたけど――まだ渋ってるわ

「さぁ、寝ましょか?」

「はっ、はい…」

「あの…いつもこんなツインのベッドに一人で？」
――…ん…鋭い質問…
「えぇ…だって広いじゃない！！」
だめね…汐里ちゃんも気づいてるわ…
「…あとは――」
――どさっ――
――どさっ――
「こうやって汐里ちゃんを押し倒したりできるからよ――♪」
「きゃぁ――！！」
ベッドのスプリングの反動で汐里ちゃんが上から押さえこむ体勢になる――…
「ち…ちょっと…久木さん！！」
可愛い…
「汐里ちゃんの…」
「…？」
「えっち――♪」
たぶん、めがとん級の雷が落ちたと思う――「ひっ…ひさ…久木さんが倒したんでしょうが――――！！！！！！！！！！！！！！」

ふふ――からかい甲斐があるじゃない（笑

汐里ちゃんは暴れたが、あたしも汐里ちゃんを抱きしめて離してあげなかったから、諦めてすやすやと寝こけてしまった――

prima prima：13 彩香

――――――――――――――――――――

――あったかい…

からだがふわふわする…

「ん…んん…」

朝、かぁ…久しぶりにこんなあったかいところで目が覚めた…前のアパートは最低だった…

外見からしてぼろぼろで…安いからという理由で入ったのだが、すきまからくる風は冷たいし…

壁も結構薄いみたいで、早朝はもう最悪…

頬に伝わる空気の冷たさに何度目が覚めたことか…

でもここは気持ちいい…顔に当たるこのふわふわがもう…

……ふわふわ……？

――パチ――――――

目を開けたが朝日が入ってしまい――近くにある枕をぐっと寄せた

――

……ふわふわだぁ……

――――くすくす――――

どこかから忍び笑いが聞こえた…
おそらく久木さんだろう…

起きなきゃ…って呟いて目を再度あけると…そこには…

「きゃぁ――――――――――――――――――――！！！！」

久木さんの胸が――私――
あぁ――――――――！！！！！
なんてこと……！！
恥ずかしい…………………！！

久木さんまだ笑ってる…

このひとは…！！わかってて！！
「久木さん！！」

起きようとしても話してくれず…結局まだ久木さんの腕の中にいる…

「汐里ちゃんの…」
「あ――――！！！」
「えっち…」

だいたい予想していたが…
耳元で呟かれて、きっと今凄い赤面しているだろう…

「だって…だって…ふかふかで…柔らかくて――――」

――その声はそのまま久木さんのまた熱い抱擁によってかき消された――――

prima　prima：14　汐里

――――――――――――――――――――

はぁ――朝の汐里ちゃんってば…
ホントかわいかったなぁ――
あたしのこと枕かなんかと
勘違いしてたのかしらね（笑

ついむぎゅってしちゃった…

そういえば今日は授業、
午前で終わるっていってたわね…

お昼はいるのかしら…

――重たい身体を起こして
キッチンに向かうも、
ひどいものだ
――冷蔵庫は空っぽ…

今日はじゃあ、
サンドイッチでもこしらえて
車で迎え…いっちゃおうか―

———mail
————————————————————
hisaki　ayaka

汐里ちゃん――
今日はサンドイッチでも
こしらえて、

車で迎えに行くから

良い時間教えて――!!

———mail
————————————————————
shiori　chan

ええと、じゃあ
二時半に葉山冬木公園に…

———mail
————————————————————————
hisaki　ayaka

了解――――！！

楽しみだなぁ――！！

「汐里――！！」
――友達に呼び止められた
「ん――？」

「今日この後一緒に
お昼食べにいこ！！」

「あ…や、ちょっと
大事な約束あってさぁ…」
「え――、まじで―？
彼氏か！！とうとう

あの独り身汐里に
彼氏できたか――――！！」

「そ、そんなんじゃ…
だいたい、女の人だからさ

――それより時間ないの！！
ばいばい！！」

――mail
――――――――――――――――――――――――
hisaki　ayaka
大学出てすぐのちっちゃい
青い車よ――

――青い車…？
いや、まさか……
だってあんな高そうなの…！！

「汐里ちゃ――ん！！
早く――――！！！」

ま・じ・で・す・か――――

「汐里――！！

彼氏は金持ちか――！！」

友達のやじも耳を通りすぎてく

ほどにびっくりだった――

prima prima：15 彩香

――――――――――――――――――――――――

――ガチャ――

「ちょっと！！
どんだけ金持ちなんですか！！」

ドアが開くのと同時に
聞こえてきた汐里ちゃんの声

「ふふ―わかったでしょ―？
ほら、ほら！！
早く入って入って！！
風邪ひくわよ」

ふふふ―驚いちゃってまぁ…
「さあて―ここで食べちゃいましょ」

中に詰めてあるのは―

はちみつのサンドに、
イチジクジャムのサンドに、
あとは、ハムレタスサンド

「美味しそう―！！」
「たくさん食べてね――」

――もぐ――もぐ――――

「美味しいです――――」

「紅茶もあるからね――♪」

――――――――――

凄い食べるわね

あたしがジーッと見てると

「…なんですか？」

「ううん…ただ―

美味しそうに食べるなぁって」

「……」

顔、赤い（笑

「ふふ…かわいい」

「かわいくなんか…ないですよ…」

恥ずかしいんだぁ…

あぁ――はまっちゃったわ、

もうかわいくて、かわいくて

しょうがない――！！

「ごちそ―さまでした」
「お粗末様♪」
さぁてと…
「行きますか――！！」
「はっ、はい…」

――ゴトン―
今はお目当てのお店の
駐車場――
家具を買うならこれくらい
大きくないと――

prima prima：16 彩香

――――――――――――――――――――――

「ふぅ――――着いた」

「おっきな駐車場――――！！」

あたしたちは家具専門の大手の店へ来ている――当然だが、お昼間ここは、新婚の夫婦やらが家具を揃えにとかで――それはもうごったがえしているのだから…

「はぐれないように
手を繋ぎましょ♪」

大変だわ！！
汐里ちゃんが奇声をあげてる！！
→自分のせい

「恥ずかしいですよ――…」
「うふふ…良いから、良いから」

二人一緒にエレベーターに乗り、中に入って行った――

――――――――――――――――――――――

――チン――――――――

エレベーターを出ると予想通り、もの凄い混み方だ――

そだっ――――

「基本どんなデザインがいい――？？」

「手頃な――――」

やっぱり。言うと思ったわ（笑

「値段なんて良いから――！！

値段気にしてたら、

良いもの買えないわよ」

――――――あっ！！

あそこの一角は――

「これなんてどうかしら♪」

この机に…椅子に…

それから、あのタンス――

後は……

「ひ、久木さん！！

早いです――――！！」

ありゃ、汐里ちゃんが息をきらしてる…悪いことしたなぁ――

「ごめんね――つい夢中になっちゃって」

あそこのカフェで一息つこうかしら――――
「ちょっと休憩しよっか――」

―――――――――――――――――――

―――――――――――

「ふぅ―…」
「それで――どうだった？」

「ふぇ―？？」
「家具よ―家具…
気に入ったかしら？」

「あ、凄い気に入りました！！
でも、申し訳なくて…」

「気に入ったならいいじゃない♪
言ったでしょ―？

あたしお金持ちなの…
一人じゃ使いきれないくらいに…」

――さ、行きましょ♪
そういってあたしは彼女の手を引いた――――――――

prima　prima：17　彩香

――――――――――――――――――――

ふぅ――――――終わった…

「お疲れさま！！」

「えぇ…ありがとうございました…」

汐里ちゃん――

だいぶ顔も疲れてるみたい

結局、家具はシックなデザインにまとまった――彼女も気に入ってくれたみたいだ。

「たぶん、明後日までに運んでくるからね」

「あ、はい！！今日は楽しかったです！！」

良かった――嬉しい…

「そう――良かったわ疲れたでしょ――？」

「はい…ちょっとだけ…」

「じゃぁ車に戻ろっか♪」

結局二人とも手は車まで離さなかった――

「汐里ちゃん…？」

ス――…、ス――…
疲れたのね…

「おかげで、
あたしも楽しかったよ…」

あたしはそう呟いて
静かに車を出した――

家に到着――もう6時半だ…

あたしの肩で眠る汐里ちゃんを
なんとか優しく起こして、
二人で家に入っていった――

「お腹は空いたかしら？」
今日は歩きまくったから、
小柄な汐里ちゃんは疲れただろう。

「…あ、少し…」
目を擦りながら答えてくる

「そうね…今から晩ご飯

作る元気はないわよね……
今日はじゃあ外食しましょ♪」

「え…でも――」
「いいの、いいの――」

そして今――家から一番近い、ファミレスに二人で入っている。

prima prima：18 彩香

――――――――――――――――――――

あたしの目の前には今――――……

「彩香――さ――ん♪」

今――――……

「ねぇ――手ぇ繋ごおよ――♪」

今――……

――――――ふぎゅ――――……

「ち、ちょっと！！

だきつかない！！！！！」

「彩香さんが照れてるぅ――♪」
酔ってご機嫌な
汐里ちゃんが…いる……
―もう…仕方ないなぁ――
「ちょっとよ―…？」
手を繋いであげたら
静かになった
――ぎゅぅ――――…
「彩香さあん…」
「ど―したの??」
「わぁあ――――――ん!!」
「ちょ、ちょっと!?」
急に大人しくなったかと思えば
びっくりだ――
急に泣き出してしまった。

あたしは泣き出した汐里ちゃんを胸に抱きよせて、まぶたにキスを
おとした――――…
彼女が落ち着くように…彼女がもう泣かないように…そう願って――

そのうち、汐里ちゃんは泣き止んだ
「落ち着いたかしら…？」

「うん…落ち着いた…」
「どうしたの…？何か嫌なことでもあったのかしら…？」

グスン――…グスン―グスン―…
やばい、また泣き出しそうな雰囲気…
「う…あ、あたし…ね…
えぐ…あたし…不安だったの…

アパート追い出されて、
帰れる場所がなくなったら
どうしようかって…」

――うん

時折頷きながら抱きしめる……
「それで―…それで
彩香さんと会って…
凄く安心しちゃって…
それで…お酒飲んだら…
全部溢れて来ちゃって…」

――うん

「で…泣いちゃっ…て
あたし…あたし…
泣いてたら嫌われちゃうって…

彩香さんに嫌われたくないって…
それで…それで――」

――ギュ――

大丈夫よ――

――嫌いになんか…なるもんか

そう言って汐里ちゃんを
抱きしめてあげた――

prima　prima：19　彩香

――――――――――――――――――――

――泣き止んでもなお、
汐里ちゃんはまだあたしの腕の中にいる。

――目を閉じて、
恋人みたいに寄り添って、
力無くあたしの背中に腕を回して。

――時間はまどろむみたいに、
ゆっくりと過ぎてゆく…

急に汐里ちゃんは腕を離して、
あたしと向き合った。
「彩香さん…あたし…」

つい、どきっとしてしまった。
夜風に髪をなびかせる彼女が
あまりに綺麗だったから。

「あたし…彩香さんが好きです…
こんなに落ち着いたの初めてで…」

「あ、ありがとう…

あたしもよ…」
好き…どんな好きだろう…
わからないけど、嬉しい…

「さあ、もう帰りましょう」

小さな声で――はい、って聞こえた。

あたしのは、どんな好きなんだろう…
わからないけど大事にしたい。
二人で一緒に…

――やっぱり手を繋いで歩く。

二人で歩く、この夜道はとても綺麗だった……

――いつの間にか家に着く。

あっという間だった。
汐里ちゃんは少し眠たそうにソファに寝ころんでる。

――ふふ…こうやってみると、最初っからこの家の住人だったみた

い…
「そんなところで寝てたら風邪ひくわよ？」
「んん…」
もう、しょうがないなあ――
「寝るならベッドで寝なさい？」
そう言って、ひょいっと汐里ちゃんを持ち上げた。
そのままゆっくりとベッドに横たわらせて、布団をかけてあげる。
「今度は…あたしが抱きしめてあげる番ね…」
ほんとは汐里ちゃんが可愛いすぎたから。だからそんな言い訳みたいなこと言ってごまかしたんだ。
ただ…汐里ちゃんは可愛い寝顔で、あたしの腕の中にいてくれるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8775f/

ｐｒｉｍａ ｐｒｉｍａ

2010年12月21日15時21分発行